

# 子どもの主体性を重視した学びの接続

## —保幼小の連続した教育とは—

Connection of learning with an emphasis on children's independence  
—What is a continuous education of childhood—

兼平 友子  
Tomoko KANEHIRA

青森中央短期大学幼児保育学科  
Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words：主体的・対話的で深い学び イエナプラン教育 保幼小接続

### 1. はじめに

子どもが主体的に物事に取り組んでいる時は、心から楽しんでいる時である。時が経つのも忘れ、没頭し、たとえ途中失敗をしようともめげずにやり通す。試行錯誤すらも楽しんでいるようにも見える。次から次へと新しいアイデアも生まれてくる。子どもの主体性を育むには、私たち周りの大人が、いかに子どもたちが夢中になれる環境を提供できるかが重要なのであり、保育者・教師から与えられたものだけを得ることではない。これは、幼児教育だけではなく、小学校以降の学習においても同じことがいえる。子どもたちが主体的に学習に取り組まなければ、真の学びにはつながらない。子どものやる気をあまり考慮しない学習方法というのは、暗記力向上、反復練習にはなるかもしれないが、時が経つと忘れてしまう。物事の理由が自分なりに理解できていないから、時が経つと忘れてしまうのではないか。子どもたちから、なんだろう、どうしてだろう、おもしろい、が生まれてこそ、それが学びにつながるのである。

本来、学ぶことは楽しい、面白いものである。子どもが主体的に動いている時には、学習しているという自覚もなく、ただ夢中になっている。幼児期の教育では、実はそれが、学びなのである。教育において大事なことはこれである。保育者及び教師の役割というのは、子どもたちに学ぶこと・分かることは楽しいものだということを、伝えることなのではないのだろうか。伝えるためには、教師自らが面白いと思う授業づくりが展開できていないと伝わらない。

現行の学習指導要領の中でも、主体的・対話的な深い学びができるような授業づくりが求められるようになっており、子ども達自ら学習に取り組むような授業づくりの改善をはからなければならない

としている。

では、小学校での学習において、どうすれば子どもが主体的に学ぶといえるのか。子どもが主体的に、子どもから発せられた学習内容を展開していくには、経験カリキュラムの考えで行わなければならないが、現行の授業スタイルでは難しい。小学校以降の学習においては、各学年での学習すべき内容が学習指導要領により決まっている。それらを網羅しながらすべての教科を経験カリキュラムとして行っていくのは、かなり難しい。経験カリキュラムは、子どもの興味・関心を中心として授業づくりがなされていくため、学習すべき事柄を全て網羅できずに終わってしまう可能性があるからだ。

経験カリキュラムの要素が強い幼児教育と小学校以降の教育との接続において、ここに違いがある。この違いを埋めるためには、幼児期の時から、物事に対して敏感になること、そして、なぜだろう、どうしてだろう、という疑問を常に持ち、追及してみよう、試してみようとする力を養うような保育を目指したい。その力が、次の小学校での自ら課題を持ち、自分で解決に向かおうとする力へとつながっていくはずである。小学校での教科学習においても、子どもたちにとって、なぜだろう、どうしてだろうが溢れる授業づくりを設計していくことが、主体的・対話的で深い学びへ導いていくのではないかと思うのである。このような子どもたちが主体的に学習してく教育として、リヒテルズ氏は、「ドイツの教育学者ペーター・ペーターセンがイエナ大学の実験で取り組んだ学校教育の考え方である、イエナプラン教育と酷似している」<sup>1)</sup>と述べている。さらにリヒテルズ氏が、「イエナプラン教育は、新学習指導要領が強く求めている課題に十分に応えるものであるだけでなく、さらに広い視点からの深い教育ビジョンに支えられている」<sup>2)</sup>と述べているように、イエナプラン教育は、これからの時代に必要な教育法であると考えられる。また、少しずつではあるが、我が国でもイエナプラン教育を行う小学校が存在し始めている現在において、もっと広く普及されるためには、どのように授業づくりを改善していくと良いのか、幼児教育との接続も考えながら、考察していきたい。

そこで本研究では、小学校教育における子どもたちから作り上げる学び、授業づくりについて検討するために、イエナプラン教育について追及しながら、我が国での教育法として可能であることを考察する。また、保幼小の接続にあたって、幼児教育からの一貫した教育法についても考察していきたい。

## 2. イエナプラン教育の特徴とその教育法

イエナプラン教育とは、ドイツの教育学者ペーター・ペーターセン（1884-1952）がイエナ大学の附属校で取り組んだ教育の考え方である。最初にドイツにおいてペーターセンがイエナプラン教育を行ったがほとんど普及されず、後にスース・フロイデンタールによって、オランダの教育にイエナプラン教育を適用させ、広く普及されていくこととなったようである。イエナプラン教育のコンセプトの中心は、「共に生きることを学ぶ」である。自分自身を大切にすることや自分のいる集団を大切にすることを大事にした教育である。学習方法については、「何をどう学ぶかについて自分自身で決める自由を多く与えられている」<sup>3)</sup>ことが特徴として挙げられている。

ここで、ペーターセンが提唱した学校教育について整理する。  
まず、1つ目が、「生きて学ぶ共同体としての学校」

2つ目は、「教える」から「育む」へ

3つ目は、異年齢学級制（学年制の破綻 インクルーシブ教育）

4つ目は、対話重視の授業

（リヒテルズ直子著：『今こそ日本の学校に！ イエナプラン実践ガイドブック』、教育開発研究所、2019年 フレーク・フェルトハウス、ヒュバート・ウィンターズ著、リヒテルズ直子訳：『共に生きることを学ぶ学校 イエナプラン教育ってなに？』、株式会社ほんの木、2017年電子書籍版より）

今回イエナプラン教育に注目したのは、このペーターセンが描いた「学校を知識伝達の〈教える〉場ではなく、子どもの発達を信じて〈育む〉場」<sup>4)</sup>といった考えである。未だ、知識伝達の教える要素が強い小学校教育において、教えるから育むへと変化を遂げていくためには、この共に生きるという精神を根底に、子どもたちも教師も周りの大人もみんな同じく共に育む教育を作り上げていく必要があると考える。教師側からの意見ではなく、常に子どもたちの考えを聞く・そして寄り添う・耳を傾ける、共に考えることを重要視する教育は、現在の幼児教育の原理とつながるものと思われる。幼児期の教育では、教えるという要素は少なく、子どもたちの良さを引き出すために促す、環境を整えることが保育者の基本的な役割である。いわば、保育者は、影の存在であり、この点において、イエナプラン教育と同じであるといえるだろう。

そう考えると、幼児期の教育から小学校の教育への接続は今よりもスムーズになるのではないだろうか。ただ、幼児教育においても原理としては、このようにあるが、実際の保育に至っては、まだ改善すべき点が多々ある。これについては、次の章で述べる。

またペーターセンは子どもたち一人ひとりの異なる個性にも注目し、インクルーシブ教育を掲げた。そのために、異年齢集団での教育を取り入れ、一斉授業ではなく、対話を重視した学習の仕方を示している。作田氏・中山氏によると、イエナプラン教育による対話的コミュニケーションを重視した学習活動を行うことによって「異年齢による価値多様な側面から物事への多面的な見方考え方が行われ、これまでの自己を問い直す効果も考えられる」<sup>5)</sup>という。さらに、作田氏・中山氏は異年齢での学習活動の中で、子どもたちは、異なる年齢の見方考え方に触れることで、自分にはない価値観に遭遇することができ深い学びへとつながっていくという。また、異年齢にすることで、同年齢では消極的なタイプの子どもであっても、聞きやすかったり、考えも話しやすいという状況が生まれ、お互いに認め合うこともできるという。認め合うことができる環境の中では、子どもは主体的に取り組もうとする。このように、主体的・対話的で深い学びを実現するためには、異なる年齢で作上げられた小集団の中で、対話によるアクティブラーニング的な学習を重視し、多様な考えに触れることで、現実可能となるようである。その時、教師は課題設定の選択肢を多様に用意する、会話の形態を工夫するなどを行い、対話によるアクティブラーニング的な学習が有意義に行われるよう環境を整えるという役割をする。このことから、深い学びができるためには、あくまでも教師が授業を方向づけるのではないことが分かる。児童の意見が尊重され、教師は援助に徹底する。ここに教えるのではなく、育む教育がある。

表現力・問題解決能力・思考力を育てていくためには、事を多角的に見る・考える力が必要であり、イエナプラン教育はこの要素を大いに育むことができる教育方法だといえる。

### 3. 幼児教育からの接続

先に述べたように、イエナプラン教育はこれからの教育法・学習法として有効であると考え。そして、イエナプラン教育は、子どもの主体性を育てていくことを重視した今の我が国の幼児期の教育理念によく似ている。自主性・自律性を大切にした幼児教育での保育者の役割は、主体的に取り組むことができるような環境を整え、支援・援助をすることである。遊びの中で常に保育者は子どもたちに寄り添い、共に考え、時に共に迷い、共に学ぶ。保育者は、子どもたちの心の拠り所となり、子どもたちをサポートする。何かを教えるだけではない。

実際の保育においても、保育者は子どもたちの思いに寄り添いながら子どもたちと過ごしていることは十分いえるであろう。プラスして、これからはもっと、子どもたちの思い・疑問から生まれる保育をつくってくように、保育の工夫が必要だと思うのである。実際には、子どもたちが疑問に思ったこと、興味・関心のある事柄に沿った保育を行うことは、難しい。子どもから発する保育を行うためには、日常の子どもたちの様子をよく観察する目を持っていなければならないし、保育者はどんな思いにも応じることができるよう、遊びを子どもたち以上に深めておく必要がある。そのためにも、常に何気ない子どもたちの会話やつぶやきを大事にする保育を心がけていきたいものである。

このように、子どもに寄り添い、子どもの思いを大事にした幼児教育を行っている教育法がある。オランダのピラミッドメソッド幼児教育法である。

また、イエナプラン教育において欠かせないのが、主体性、対話・コミュニケーションであるが、この対話重視の保育についても、我が国のこれからの課題といえる。ここで、子どもの自主性を重視したピラミッドメソッド幼児教育法と、対話を活動の中心としているイタリアのレッジョ・エミリア保育について見てみることにする。

#### a) ピラミッドメソッド幼児教育法

オランダ政府教育機構（Cito）より発せられ、オランダ全てで取り組まれているピラミッドメソッド（Pyramid the method）は、子どもが将来いろいろな問題を自分で解決していくことができる子どもにすることをねらいとして取り組まれている。自分で問題を解決していこうとするためには、子ども自身がいろいろなことに積極的にならないといけない。ピラミッドメソッドでは、子どもが積極的に遊ぶことを通して知識を得、能力を得、成長する<sup>6)</sup>と捉えている。それは、積極的になることで、これまでの経験を最大限に生かし、さらに未知なるものへ挑戦しようとし、その中で得た事柄（失敗や成功等）を通して、自分自身の生活に置き換え、身に付けていくことへとつながっていくからだと思われる。積極的・主体的になることで、学びにつながっていくと捉えられる。

また、ピラミッドメソッドでは、子どもだけでなく、保育者の自主性も同じくらい重要なものとしている。保育者の自主性とは、保育者が子どもに対する働きかけにおいて、すべて目的をもって行うことを意味する。子どもがいろいろな経験・体験をするには、保育者が遊びのきっかけを作ったりするようなしなかけが必要とされており、どんなおもちゃを選び、どんな遊び方を考えるかが保育者の指導の仕方（自主性）となってくる<sup>7)</sup>ともいっている。その為には、日常の子どもたちの様子を観る保育者の観察力、子どもを見る眼、視点が問われる。その子、その場に合った子どもへの寄り添い方、

手助けの仕方が次につながるきっかけをつくるので、保育者のする言動には必ず意味があり、どんな些細なことであっても、子どもへの効果を考えた上で行動しなければならない。支援を考える際には、子どもの発達を考慮し、“できることから少し新しいことへ”の手助けをする。そして次の発達段階をも視野に入れ援助・支援していく。“できることから少し次の新しいことへ”子どもたちを導いていくためには「保育者は子どもと同様またはそれ以上に遊び込めなくてはいけない。まずは保育者が楽しめなければいけない」<sup>8)</sup>と宮野氏、実戸氏が述べていたように、保育者が遊びを知ることが大切であり、遊びをいくつもの角度から捉えられ、複数の遊びに発展できるようにしなければならない。

ピラミッドメソッド幼児教育法では、子どもたちから発せられる疑問、発見、不思議に保育者が耳を傾け、そこから保育を構成していく「プロジェクト保育」を行っている。毎月子どもたちの日常生活の中から取り上げたテーマがあり、そのテーマについて、各年齢の発達段階合わせて保育が深められるよう、段階的に保育が進められている。その際、子どもたちの興味関心が湧くような工夫をし、必ず子どもたちの身近なことや知っていることからスタートする。そうすることで、子ども一人ひとりが「自分はできる」という自信を持ち、積極的にチャレンジしようとする姿勢が生まれる。このように、子どもたちが身近なものに対して関心が持てる工夫、そして子どもたち一人ひとりが認められることで自信を持てる工夫がなされているのである。

## b) レッジョ・エミリア保育

イタリアのレッジョ・エミリア保育の基本概念にあることは「共同性」「プロジェクト」である。共同性とは、子どもと保育者はもちろんのこと、保育者同士も共同で学び、交流をはかることでより考え方を広げ、深めることを重視する保育方法である。ゆえに、全ての保育を保育者と子どもが一緒に作り上げていくことを基本としている。したがって、レッジョ・エミリア保育では、保育がどのような方向に進んで行くのか、どのような活動を行うのかなど、あらかじめ決まっていなく、保育者と子ども同士の話し合いによって決めていく。大人と子どもがお互いに学び合うという基本的な姿勢があるので、保育者も一緒に保育をつくりあげ、学んでいこうとする。ここに、イエナプラン教育の共同性の性質を見ることができる。そして、レッジョ・エミリア保育の活動の中心は「対話」である。保育者は、子どもたち同士のディスカッションを大切にす。子どもたちが話し合いを重ね、活動に広がりや満足感が得られるよう援助する。保育者の役割は、子どもたちが自分の思いを話せるように、また考えを深められるように適切な質問を行いながらディスカッションの手助けを行うことである。子どもたちのアイデアを中心に保育が行えるようにディスカッションの記録をとり、検討する。そこから子どもたちが知りたいことや、子どもたちの考え、疑問などを検討する。保育者は子どもたちが自分たちで疑問を解決したり、仮説を確かめたりできるよう援助をする。保育者は、子どもたちで活動を行うようにするために、子どもたちの様子を細かく観察することが大事であり、それを記録する。このように子どもたちのつぶやきや会話を大切にし、子どもの思いや考えから保育を展開していくというのがレッジョ・エミリア保育である。

以上のことから、主体性・共同・対話を中心としているレッジョ・エミリア保育は、まさにイエナプラン教育と同じ精神を持ち合わせているといえるだろう。保幼小接続において、幼児教育から小学

校教育への一貫した教育を行うためには重要な事柄ではないだろうか。

#### 4. 主体的な学びを実現するための授業づくり

これまで述べてきたように、主体的に学びに取り組むためには、子どもたち同士のコミュニケーション・対話を中心とした授業づくりが求められる。若松氏が「まずは、相手に思いを伝えられる場を増やす」<sup>9)</sup>と述べているように、自分の思いを話す場面をふんだんに取り入れた授業づくりをまず行っていくことから初めてみると良いだろう。その際には、小さいグループに分け、その中で自分の考えを話す経験をたくさん行うことからスタートする。子どもたちは、相手に思いを伝えるという経験が少ないので、こんなことを言ったらどう思われるか、という不安の方が先に来てしまい、なかなか話すことができない子どもが多い、というのが現状である。ゆえに、子どもたちが自分の思いを話すことに抵抗のない環境づくりが、教師には求められる。それには、お互いを認め合える学級づくりが重要となる。まず教師が子ども一人ひとりが異なることを理解することが前提であり、その上で教師も含め子どもたち同士が多種多様な考えが存在すること、またそれを認め合える環境設定が重要となる。イエナプラン教育のように、異年齢で構成された小集団で学習活動に取り組むことができれば、同年齢よりもなお、お互いに認め合うこともでき、自信につながり主体的に取り組もうとする意識へとつながっていくだろう。しかし、我が国の教育の現状を考えると、教科の全てで異年齢の集団で授業を行うことは難しい。それは、リヒテルズ氏が述べているように、我が国は教科書中心の教育であり、各学年で網羅すべき内容が決まっている。<sup>10)</sup>すでに決まっている内容を行うための授業づくりではなく、やはり、子どもたち自身が自分の身近な生活の中から生まれた疑問等から仮説を考え、調べ、実際に実験をしてみたりして、お互いに考えを深め合えることで、子どもたち自身が分かった、学ぶということは楽しいということにつながっていくだと考える。その学習活動の中では常に、対話・会話をふんだんに取り入れ、自己の考えを深めていく。学習活動を進めるにおいて大事にしたいことは、もし〜だったらという仮定を考えること、他の人の考えに、なぜ、と問いを持つことが深い学びへとつながるカギともなる。イエナプラン教育の6つのクオリティーの中に批判的思考という要素がある。<sup>11)</sup>これは、否定するという意味ではなく、なぜ、と問うことで、主体的に物事を考えることにつながり、探求心・好奇心を育てていくことにつながるようである。

また、イエナプラン教育では、遊びから学ぶことも実践されている。<sup>12)</sup>子どもは遊びから学ぶ。まさに、幼児期の教育理念そのものである。遊びは子どもの自発性から生まれるものであるので、自ら考え工夫しながら満足のいくものへと進めていく。主体性を育てていくためには、小学校以降の教育においても、幼児期の教育の理念は変わらず持ち続けることが大事であると思うのである。

#### 5. おわりに

保幼小接続を考えたとき、根底にある理念は一貫していなければならない。現行の幼稚園教育要領と小学校学習指導要領においては、幼児期に育てたい項目と小学校での学習でさらに伸ばしたい項目とに統一性を持たせた。これからは、保育・教育においてその中でもさらに育ていきたい主体性、

自分で学習課題を見出し、自分たちで解決するという力を伸ばすための保育活動・授業の改善が求められる。教えるから、共に学ぶ教育へ移行していくには、保育者・教師が導くのではなく、子どもたちから発せられるような工夫、環境設定、教師の学びが必要である。

ピラミッド幼児教育のように、子どもたちにとって身近な事柄から発せられる保育を行うことは、疑問・不思議が生まれやすい。またレッジョ・エミリア保育のように対話を中心に保育をするということは、子どもたちが自ら考えようとし、自分とは違う考えの存在に気付くことで、さらに学びが深まる。ゆえに、幼児期の時から、身近なものに敏感になる習慣を付け、なぜ、どうしてという疑問をもつよう、また、子どもたち同士のコミュニケーションを中心とした保育活動が展開できるよう、保育者も教材研究と学びを深めていかなければならないのではないだろうか。そして、小学校学校での学習の仕方も子どもたちから生まれる学びを目指して、子どもたち同士の対話を中心とした授業づくりがこれからは重要であると考えられる。

「子どもたちが学ぶことの本質的な楽しさに気付くことで、学習は広がり、つながり、深まっていきます。」<sup>13)</sup>、「人間は自分の意志によって物事に取り組むことで才能が全開になる。」<sup>14)</sup>と若松氏、小林氏が述べているように、子どもが自ら疑問を持ち、追及しようとすることで初めて学ぶ楽しさを知るのである。学ぶ楽しさを知ると、また次への探求心が生まれる。これは、小学校から行ってもなかなか身に付かない。やはり、幼児教育からの学びの仕方がベースとなり、影響するので、幼児期の段階から、いろいろなものに興味を持ち、疑問を持つよう、保育者は環境設定の工夫をしていかなければならない。そして、それを解決しようとする力が大事であり、それを支える保育者の支援も重要なものとなる。津守氏が、小学校以降の教師も「もともと人間を育てる保育者である」<sup>15)</sup>とも述べているように、幼児期の教育の基本姿勢は、その後の教育においても一貫して変わらないものとなっているべきであると思われる。

今回は、子どもの主体性を重視する授業づくりについて、大まかな概略しか述べることができなかった。これからの課題として、実際に保育を行うにあたって、また小学校の教科を行うにあたって具体的にどのように行っていくと良いのかについて、イエナプラン教育を実際に行っている学校の特徴等を取り上げながら、研究を進めていきたい。

## 〇引用文献

- 1) リヒテルズ直子著：『今こそ日本の学校に！ イエナプラン実践ガイドブック』、p9、教育開発研究所、2019年
- 2) 同上、p10
- 3) フレーク・フェルトハウズ、ヒュバート・ウィンターズ著、リヒテルズ直子訳：『共に生きることを学ぶ学校 イエナプラン教育ってなに？』、p222、株式会社ほんの木、2017年電子書籍版
- 4) リヒテルズ直子著：『今こそ日本の学校に！ イエナプラン実践ガイドブック』、p14、教育開発研究所、2019年
- 5) 作田澄泰、中山芳一著：『多面的・多角的思考に根差した教育原理の考察』、p5、岡山大学教師教育開発センター紀要、第10号（2020）
- 6) ジェフ・フォン カルク著 辻井正監修『ピラミッドメソッド保育カリキュラム全集ピラミッド

ブック基礎編』子どもと育ち研究所、2011年

- 7) 同上
- 8) Pyramid method幼児教育法講座より、2011年
- 9) 若松俊介著：『教師のいない授業のつくり方』、p70、明治図書、2020年
- 10) リヒテルズ直子著：『今こそ日本の学校に！ イエナプラン実践ガイドブック』、p128、教育開発研究所、2019年
- 11) 同上、p25
- 12) 同上、p50-53
- 13) 若松俊介著：『教師のいない授業のつくり方』、p24、明治図書、2020年
- 14) 小林朝夫著：『子どもの「頭のよさ」を引き出す フィンランド式教育法』、p104、青春出版社、2008年
- 15) 改訂・保育士養成講座編纂委員会編集：『改訂3版・保育士養成講座 第9巻 教育原理』、p125、社会福祉法人全国社会福祉協議会、2007年

#### ○主要参考文献（引用文献で取り上げたものを除く）

- ・リヒテルズ直子著：『オランダの教育はなぜ成功したのか イエナプラン教育に学ぶ』、平凡社、2014年
- ・井上健著：『開かれた教育改革モデルとしてのイエナプラン—オランダにおけるイエナプランの受容と展開—』、東京都市大学共通教育部紀要、2018年
- ・木村明憲著：『单元縦断×教科横断 主体的な学びを引き出す9つのステップ』、株式会社さくら社、2020年
- ・J. ヘンドリック編著 石垣恵美子・玉置哲淳監訳：『レッジョ・エミリア 保育実践入門』北大路書房、2012年
- ・島田教明・辻井正共編著：『21世紀の保育モデル—オランダ・北欧幼児教育に学ぶ—』、株式会社オクターブ、2009年
- ・兼平友子著：『東北女子短期大学紀要 第57号』、2018年
- ・辻井正著：『アクティブ・ラーニング プロジェクト法～自ら考える生きる力の基礎を身につける～』株式会社オクターブ、2017年